

『緋文字』における姦通から子孫繁栄への道 —進化心理学からの考察—

藤沢 徹也

1. はじめに

ナサニエル・ホーソーン (Nathaniel Hawthorne) の『緋文字』(*The Scarlet Letter*) は、1850 年に出版され、アメリカを題材とした初めての本格的な作品と言われている。この作品には「税関」(“The Custom-House”) という長い序文 (エッセイ) がついている。これは全体の 1/6 に及ぶ長いものだが、もともと、『昔物語、および実験的かつ想像的スケッチ』(*Old Time Legends; together with Sketches, Experimental and Ideal*) という短編集を出すつもりで、この作品の序文として意図されていた。「税関」で、1 人称の語り手がアルファベットの A の刺繍を見つけることにより、『緋文字』の世界へ入っていく。17 世紀、アメリカのニューイングランドで、生まれて間もない子供を抱いたヘスター・プリン (Hester Prynne) が、姦通の罪でさらし台に立たされるところで物語は幕を開ける。そこに異教徒に捕らえられていたため、到着が 2 年ほど遅れた夫のロジャー・チリングワース (Roger Chillingworth) が現れる。ヘスターの姦通相手は高名な牧師であるアーサー・ディムズデール (Arthur Dimmesdale) だが、彼はその罪を告白できず苦しむ。チリングワースはヘスターの姦通相手がディムズデールであることを突き止め、精神的に追い詰めて復讐をするが、ディムズデールは最後、罪の告白をして息絶える。

この作品の姦通に関する批評の態度は一致しており、アメリカ文学史に端的に記されているように、定説になっているようだ。

ホーソンは、まさしく姦通が終わった所から書き始めている。つまり、女主人公がいかにして、またどんな理由や環境で、姦通を犯すかという所に作者の興味は存しない。彼のもっばらかかわるのは、姦通が犯された以後の問題である。姦通とは要するに罪の一形式にすぎないので、犯された罪が、当事者ならびに関係者に、いかなる影響を及ぼすかという所に、中心の問題があるのだ。(佐伯 51)

約 40 年前の文学史だが、その前もそれから変わっていない。このように、姦通自体については批評の対象にはなってこなかった。しかし、本稿では、テキスト上の様々な情報に進化心理学を援用して、考えられる可能性に迫ってみたい。

2023 年に日本ナサニエル・ホーソーン協会設立 40 周年を記念して、論文集¹が発行されたが、22 本の論文の中で『緋文字』はホーソーンの圧倒的な代表作であるにもかかわらず、この作品を中心に扱った論考は 2 本だけであった。確かに、論じ尽くされているようにも思えるが、八木敏雄が指摘するように、「『緋文字』は読者の「テキスト外推測」によって成立している希有なテキスト」であり (158)、テキスト中に情報がほとんどなく、本格的に論じ

られることがなかったことに目を向けることも、意味があるのではないだろうか。人間の本性を扱う進化心理学を援用して、今回は姦通自体について論じていきたい。

2. 進化心理学について

進化心理学は人間の本性を扱う新しいサイエンスである。本性と言うとき、厳密な定義がある。それは進化によって形成された心理的メカニズムないしは心理的な適応の全体が人間の本性であるというものだ。人間の本性は進化によって形成された心理的メカニズムであり、そのような心理的適応を明らかにしていく学問である。適応とは生物の生存や繁殖の成功率を高めることを指す。そして、次の2つのように考える。

私たちの感情などは、気の遠くなるような長い年月の間に私たちの祖先が遭遇した出来事によって形作られていて、人間の本性は私たちの祖先の過去の体験の集積であり、それが現在の私たちの感情、行動に影響を与えている。

人間の本性は普遍的なものであり、私たちの考えや感情や行動などのかなりの部分が、すべての人間（あるいは、すべての男性かすべての女性）に共通する。様々な文化においても本質的には同じである。

進化心理学の最初の画期的な研究 (landmark) は1980年代後半に発表され、1992の『心の進化—進化心理学と文化の生成』(*The Adapted Mind: Evolutionary Psychology and the Generation of Culture*) の出版をもって現代進化心理学の嚆矢とする (Kanazawa & Miller 1-3, 12)。それはしばしば現代進化心理学のバイブルと呼ばれ、どのほかの本よりもこの分野の学術的な地位を飛躍的に高めた (Ellis and Bjorklund x)。

この学問の主張を一言でまとめると、人の意思決定は進化上の目標にかなっているということである。不合理に思えたりする私たちの決定の多くは深い進化レベル、つまり、生き残って子孫を残すという観点に立つと、多くの場合賢明な決定であると言える。さらに驚くことに、現代の私たちは祖先が暮らした狩猟採集時代の脳によって支配されている。なぜ、狩猟採集時代の脳なのだろうか。人類の歴史を振り返ってみたい。約600万年前に、チンパンジーと枝分かれして人類の祖先が誕生し、約250万年前に、ホモエレクトスなど、ホモで始まる「ホモ（ヒト）属」が進化する。属という分類についてイメージしやすいように、ネコ科を例にとると、その中にヒョウ属というのがあり、それに属するのが、ヒョウ、ライオン、トラなどである。そして、私たちホモサピエンスは約20万年前に進化したが、現在ホモ属は私たちを除いて全て絶滅している (Harari ix, 3-9)。私たちの祖先はアフリカのサバンナで、安定した変化のない、自然淘汰の働く環境で、狩猟採集生活をしていた。しかし、約1万年前に農耕が始まるのだが、ここ1万年間は、進化が追いつけないほど環境が急速に変化したので、自然淘汰が起こらず、人間は1万年ほど前からほとんど進化していない。つまり、狩猟採集時代に最適化された脳で、私たちは現代生活を送っていることになる (Kanazawa & Miller 25-28)。ひとつ例を挙げると、少し満腹感があっても、ケーキや唐揚げといった甘いものや脂っこい高カロリーのものを見ると、食べたくなったり、実際食べたらないだろうか。そのために、現代ではカロリーをオーバー摂取し、肥満や病気の原因にも繋がっている。しかし、食べ物が豊富ではなかった狩猟採集時代の祖先にとって、高カロリーの食べ物に引

きつけられること、また、食べられるときに食べることが、エネルギーを蓄え、生き残ることに役立った。その時代の判断を現代の私たちはいまだに続けている。なぜ、高カロリーのもの、例えばケーキを食べたいと思ったのか尋ねたら、ケーキがとてもおいしかったからなどの理由が挙がると思われるが、実際は意識していないところで狩猟採集時代の判断をしているのかもしれない。前者を生物学の用語で「至近要因」、後者を「究極要因」という。つまり、行動について解き明かそうとする場合、それがどのような仕組みで起きるのか(“How”の問い)に関する説明はその行動の「至近要因」と呼ばれ、一方、行動がなぜ起きるのか(“Why”の問い)に関する説明はその行動の「究極要因」と呼ばれる。後者、つまり「究極要因」は、どのような有利な機能があるからその行動が進化してきたかに関する説明となりうるのである(長谷川 et al. 67)。進化心理学では、この「究極要因」をより重要視する。

文学批評に関してだが、文学研究者が進化心理学を文学研究に援用したのが 2000 年代前半のようである。ジョセフ・キャロル (Joseph Carroll) が 2004 年、デイヴィッド・バラッシュ (David Barash) とナニーユ・バラッシュ (Nanelle Barash) が 2005 年に研究書を出している。日本では、2007 年に持留浩二が『ライ麦畑でつかまえて』(*The Catcher in the Rye*) について、進化心理学を援用して論じている。しかし、その後その流れは大きくなっておらず、近年において進化心理学を援用した論文はほとんどないように思える。

3. 動物(性)について

進化心理学は進化生物学を人間の行動に適用したものだが、その学問は 4 つの原則により特徴づけられる。その中の最も根本的な原則は、「人間は動物である」というものである²。人間も動物の仲間であり、あらゆる生物にあてはまる進化の法則は、人間にもあてはまると進化心理学では考える (Kanazawa & Miller 18)。

ディムズデールとヘスターはともに、「動物(性)」に関係づけられて語られている。その他、税関の検査官や船乗りも「動物」と関連づけられている。どうやらこのテキストにおいて、「動物」とは本能のままに行動することを含意するようである。それぞれの場面を考察し、「動物」の意味するところを明らかにしたうえで、それがディムズデールとヘスターにどのような行動を取らしたと考えられるか考察したい。

ヘスターの夫であることを隠しているチリングワースは、姦通の相手はディムズデールではないかと狙いを付けて彼と同居し、その心の中を探っていく。時々、チリングワースを喜ばせる何やら兆候を発見することもあったようだが、あるとき、彼は次のように呟く。

“This man [Dimmesdale],” said he [Chillingworth], at one such moment, to himself, “pure as they deem him,—all spiritual as he seems,—hath inherited a strong animal nature from his father or his mother. Let us dig a little further in the direction of this vein!” (130-31 強調筆者)

「動物性 (animal nature)」とは、清純でも、精神的でもないということになりそうだ。ディムズデールに対して「動物」という言葉が使われていることに、これまで深く考察されて

こなかった。これは、恐らく、辞書的な意味以上のことは考慮されてこなかったからであろう。*OED*によると、名詞 3 では“A human being who is no better than a brute, or whose animal nature has the ascendancy over his reason,” 形容詞 3 では“Of or pertaining to the functions of animals; or of those parts of the nature of man which he shares with the inferior animals”と定義されている。

実は、ヘスターに対しても、姦通の罪を民衆に知らせる最初のさらし台のシーンで、「動物」という言葉が使われている。

Hester Prynne, meanwhile, kept her place upon the pedestal of shame, with glazed eyes, and an air of weary indifference. She [Hester] had borne, that morning, all that nature could endure; and as her temperament was not of the order that escapes from too intense suffering by a swoon, her spirit could only shelter itself beneath a stony crust of insensibility, while the faculties of animal life remained entire. In this state, the voice of the preacher thundered remorselessly, but unavailingly, upon her ears.
(69 強調筆者)

「動物的諸機能 (the facilities of animal life)」は、福原麟太郎の訳では「肉体的機能」とされており、これは呼吸などを指すと思われる³。生物として生きていく上で最低限のことを強調したかったからであろうが、あえて「動物」という表現が選ばれていることに注目すべきであろう。また、「動物」はディムズデル同様、精神 (spirit) と対比されている。

ディムズデルは、いわば、チリングワースから一方的に動物的なところがあるとつぶやかれ、ヘスターも語り手に動物的諸機能と言及されるだけで、多くの読者が「動物」という言葉を辞書的な意味以上に捉えず、軽く読み飛ばしても不思議はないであろう。しかしながら、序文の「税関」と物語終盤のディムズデルが罪の告白をするクライマックス前に「動物」について詳しく述べられている。

「税関」に出てくる検査官は、まさに「動物」に例えられている。「彼を単なる 1 匹の動物としてみると、—それ以外の見方はあまりないのだが—」に始まり (17)、次のように述べられる。

The original and more potent causes, however, lay in the rare perfection of his [the Inspector's] animal nature, the moderate proportion of intellect, and the very trifling admixture of moral and spiritual ingredients; these latter qualities, indeed, being in barely enough measure to keep the old gentleman from walking on all-fours. He possessed no power of thought, no depth of feeling, no troublesome sensibilities; nothing, in short, but a few commonplace instincts, which, aided by the cheerful temper that grew inevitably out of his physical well-being, did duty very respectably, and to general acceptance, in lieu of a heart. (17 強調筆者)

検査官の動物性はたぐいまれなほど完璧で、その特徴として、「そこそこの知性」で、「道徳的要素と精神的要素はわずかしがなく」、「思考力はなく」、「感情の深みもなく」、「あればあったでやっかいな感受性もない」とこれ以上ないほど酷評し、「つまり、わずかの平凡な本能以外には何もなかった」とまとめられる。他の箇所でも、彼は「浅薄」、「あてにならない」、「魂もない」、「心もない」などと羅列され、あるのは本能だけというのが私の結論だと結論づけられている(18)。「動物」の意味するところは、本能のままに行動するということのようにであり、ディムズデルとヘスターにも該当するところがあるということになるのではないだろうか。

この検査官は、しかしながら、生き残り、子孫を残すことに成功していることを見逃してはいけない。ホーソーンが数年でクビになった税関を長年務め、息子のために税関に役職を作り、息子をそれに任命している。

He [The Inspector] had been the husband of three wives, all long since dead; the father of twenty children, most of whom, at every age of childhood or maturity, had likewise returned to dust. Here, one would suppose, might have been sorrow enough to imbue the sunniest disposition, through and through, with a sable tinge. Not so with our old Inspector! One brief sigh sufficed to carry off the entire burden of these dismal reminiscences. The next moment, he was as ready for sport as any unbreeched infant; far readier than the Collector's junior clerk, who, at nineteen years, was much the elder and graver man of the two. (17)

妻に先立たれて久しく、ほとんどの子供にも先立たれたことが、悲しいことのように書かれているが、彼が 80 歳の高齢であることを考えると、このことはたいして重要でないと思われる。20 人も子供がいたのであれば、成人して亡くなった者の中には子供を残している者が少なからずいると考えられる。少なく見積もって、3 人が成人してそれぞれ 3 人子どもを作れば 9 人の孫を持つことになる。そうすると、子孫は繁栄していると言えるはずだ。

検査官は次々に配偶者を得ることに成功している事実も見逃せない。つまり、一夫多妻制を実現していることになる。名目的には一夫一妻の欧米社会でも、事実上は一夫多妻になっている。男性は離婚と再婚を繰り返し、一度ではなく、一生のうちに何人も妻を持つことができ、いわば時期をずらした一夫多妻制が可能になる。それは男性は年を重ねるにつれて、収入と地位が上がり、女性を引き付ける条件が増え、女性は年齢とともに繁殖価が低下して行く中で、男性は再婚し、女性は再婚しないことが多いからだ (Kanazawa & Miller 91)。当然、このことは収入や地位がある検査官にも当てはまる。彼は悲しむどころか、子供のようにはしゃぎ、一方、19 歳の下級事務官がそうできないのは当然であろう。なぜなら、「動物」と形容されたこの検査官は、生物である人間の究極の目的である、配偶者獲得と子孫繁栄に大成功しているからだ。

語り手は検査官を「動物」に例えながら酷評するが、この検査官が繁殖に成功していることに気づいておらず、そのことに言及していない。それゆえ、多くの読者もそのことに気づ

かないのであろう。人間の行動が究極的には配偶者を得て、子孫を残していくことを目的としていることは無意識に行われるので、私たちはそのことに普通気づかない。語り手の検査官の描写は、このことを象徴していると言えるのではないだろうか。

ディムズデールが最後となる演説をする直前の広場の場面で、ヘスターが海外への逃亡を依頼した船長にも「動物」という言葉が使われている。「ヤシの葉であんだ広つばの帽子の下からは、機嫌よく笑っているときでさえ、一種の動物的な獰猛さ (a kind of animal ferocity) をおびた両の目がぎらぎらと輝いていた」(232)。その場に、ネイティブアメリカンも登場するが、彼らは鹿革の衣装に、頭には羽を飾り、赤や黄色で肌を塗り、石でできた武器を持っているので、狩猟採集時代の生活をほぼそのまま続けている人たちだと考えられる。船長はそんなネイティブアメリカンよりも野蛮 (wild) であり、その場で一番野蛮な存在であったと語られている。船員というのは、「他のすべての人を縛っていた行動の規範を、恐れもためらいもなく、破ることができ」(232)、船員たちは、海賊行為、つまり、スペイン貿易船を襲って略奪をしても、おとがめがなかった。語り手は「海は……気ままに波打ち、うねり、泡立ち、嵐にだけ服従していればよく、人間の法律による規制とはまず関係のない領域だった」と説明する (233)。つまり、船員は本能のままに生活していたということになり、検査官とも共通する。「動物」という言葉には、17 世紀のニューイングランドではなく、ネイティブアメリカンのように狩猟採集時代の意思決定が含意されていると言ってもいいであろう。

ディムズデールもヘスターも動物的要素があるとすると、無意識であっても究極的な目的である子孫繁栄につながる行動に出てもおかしくないと考えられる。人間が作った罰則で罰せられない場所は、船乗りにとって海がそうであったように、ニューイングランドに住む人々にとって、その罰則が及ばないところとなると森になるであろう。姦通は確かに、モーセの十戒のひとつだが、狩猟採集時代の脳からすると、太古の森には神はいなかった。

原生林の森は、ニューイングランドの法から関係ない場所で、船乗りが海でしたのと同じことができる場所、つまり、本能のままに物事をできる場所でもあろう。また、森はセクシャルな場所とも言える。筆者が学部生のときの集中講義で、当時東京大学の島田太郎が『緋文字』の森について、原生林の中の真ん中を流れる小川などから女性器を象徴し、性的なものであると言われていた⁴。また、「ヤング・グッドマン・ブラウン」(“Young Goodman Brown”)という短編がある。これは新婚のブラウンが、夢か現実かはっきりしないが、森に行くと、そこには牧師も妻のフェイス (Faith) (信仰の象徴) もおり、皆、罪人であることを知ることとなり、その後、妻も含めて人間不信に陥るという話である。フレデリック・クルーズ (Frederick Crews) は、「彼[ブラウン]の旅は、実際、間接的に体験した、忌まわしいセクシャルな冒険に相当する」と指摘し (102)、ロイ・メール (Roy Male) は「森のシーンのほとんど全てが、罪人との関わりは本質的にセクシャルなものだと示唆している」と指摘している (78)。ホーソン文学の森は、人間の本能を解放し、セクシャルな場所でもあるとも言えそうだ。その本能は普段は無意識の中にある。『イメージ・シンボル辞典』(*Dictionary of Symbols and Imagery*)によると、森 (forest) は、無意識 (the unconscious)、無法者のすみか (the home of outlaws) を表す。ホーソン文学の森には普遍性がありそうだ。

4. 誘ったのはどちらか

批評ではほとんど言及されない姦通現場であるが、誘ったのはヘスターだと言及されることがある。間違っても逆はないようだ。例えば、平石貴樹は、「ヘスターが愛の確信にしたがってディムズデルをさそわなければ、おそらくかれらの姦通は成立しなかったのだろう」と述べる（131）。また、D・H・ローレンス（D. H. Lawrence）は、ヘスターは純粋なディムズデルを誘って破壊するが、それを隠して見せない、まさにアメリカを象徴していると文化論を展開している。ヘスターが誘ったことになる理由の1つ目は、ディムズデルが「繊細な感覚の持ち主（a being so sensitive）」である一方（193）、ヘスターは「生まれつき大胆で活発な精神の持ち主（with a mind of native courage and activity）」だというキャラクターのせいだと思われる（199）。2つ目は、おそらく、森の中でヘスターがチリングワースこそ実の夫であると告げた後、ディムズデルにヨーロッパに逃げることを提案し、引き続きそれを計画したことが挙げられるだろう。

しかしながら、必ずしもヘスターが誘ったわけではないようだ。ディムズデルが「私は……どうやって生き長らえればよいのか？……私のために考えておくれ、ヘスター！あなたは強いのだ。私のために、なんとか決めておくれ！」とお願いをしている（196）。再度、彼は、「私のかわりに強くなっておくれ！……そして、どうすればよいのか、教えておくれ！」と懇願する（196）。ヘスターはこれに応じて、最初はニューイングランドから去ること、次に海外で活躍することを提案することになる。このように決してヘスターが初めから誘ったわけではない。さらに、放っておいては苦悩で息を引き取りそうなディムズデルが、1人では違う世界には行けないと言うので、ヘスターは彼を救うために一緒についていくと答えている。これではヘスターが一概に海外逃亡に誘ったとは言えないであろう。むしろ、ディムズデルの方が誘った、あるいは、そう仕向けることになったと言ってもいいのではないだろうか。

2人が姦通に及ぶまで何度も会ったのか、また、その行為は複数回だったのか定かではない。ただ、最初のさし台から7年後に再会するまで、一度も会っていないようなので、森で会ったのも一度、姦通も一度ではなかろうか。八木は次のように指摘している。

……「森の小道」の章でパールはヘスターにしきりに悪魔の話をせがむ。パールが「おかあさんは夜中に悪魔に会いに行くの？」ときいたり、ヘスターが「これまで一度だけ、おかあさんは悪魔に会いました！この緋文字は悪魔のしるしです！」（187）と答えたりする会話の「悪魔」をディムズデルに読みかえることに心を決めればよい。すると「姦通小説」の筋としては、ヘスターとディムズデルが森で逢引し、濡れ場を演じたのは、たった一度で、しかもその一度で妊娠したという話になる。（161）

再度問うが、姦通に誘ったのはどちらであろうか。結論はどちらも意識して誘ってはいないことになると思われる。ヘスターが排卵期であったことが、その原因のひとつのようだ。ダグラス・T・ケンリックとヴラダス・グリスケヴィシウス（Douglas T. Kenrick and Vladas Griskevicius）によると、進化は、目の前に魅力的な女性がいるといった生殖の機会に敏感

になるよう男性の生理を磨き上げてきた。世界中のどの社会でも、女性は進んでリスクを冒して成功するような野心あふる男性に魅力を感じるのだが、ある実験では、女性の妊娠の可能性が最も高くなる時期、つまり排卵期の女性がそばにいるときに、男性は最もリスクを冒した。男性はそのことに気づかないが、排卵期の女性の T シャツのかすかなにおいに晒されると、男性のテストステロンの量が急上昇することがわかっている (17, 19)。また、ある研究で、受精可能期の女性は、自分では排卵期かどうかわからなかったけれども、よりセクシーで露出度の高い服を選んでいて、本人は気づかないが、排卵に促された女性は、異性の目により魅力的に映るように設計された行動を取り、配偶の機会が最大になるような選択をしている (14-15)。パール (Pearl) が生まれているので、姦通があった際、ヘスターが排卵期であったことは間違いない。シャロン・モレアム (Sharon Moalem) は、妊娠する可能性が高いとき、本来のパートナー以外の男性に最も惹かれるというある研究者の言葉と、ある研究誌に発表された、女性が妊娠する可能性のレベルが最も高いときにパートナー以外の男性との性交を夢しがちという事実から、女性は排卵時期に無意識の浮気性 (cheat) になることが確かめられたと述べている (75)。

女性も男性を選ぶとき、においが関係しているようだ。モレアムがクラウス・ヴェキンント (Claus Wedekind) の実験を紹介している。女性に男性の T シャツのにおいを嗅いでもらうと、高い頻度で女性は自分の免疫システムとは違う男性のものに魅了された。つまり、私たちの免疫システムのカギを握るとも重要な遺伝グループ、つまり、HLA (人白血球型抗原) が異なるものを選んだ。HLA は免疫システムの中心的な役割をしており、それに相対的多様性があればあるほど、免疫システムは強固で柔軟性を備える。それゆえ、生まれてくる子供に最強の免疫システムを与えたいと思えば、自分とは異なる HLA システムを持つ相手を選ぶ必要がある。私たちがこれを見つけるのに、においが関係している (79)。モレアムは続けて、レイチェル・ヘルツ (Rachel Herz) の、あなたの体臭はどんなにおいであろうとも、あなた特有の HLA が反映されているという発言を紹介している (81)。ヘスターが姦通相手としてディムズデールのことを世間に明かさず、7 年間も彼のことを慕い続けていたことを考えると、彼のにおいが彼女にとって好ましいものであった可能性は十分にあるであろう。

そもそも、進化的に女性は地位の高い男性を好む傾向がある。それは、その男性は資源を持っているからだ。ヘスターは無意識に地位の高いディムズデールを意識し、森で再会したときのように、男性にアピールできる黒髪などを知らず知らずのうちに利用して魅力的に映るような行動を取り、ディムズデールも若くて美しいだけでなく、排卵期でもあったヘスターにより意識を向けたことも考えられる。

5. 2人にメリットのあった姦通

現代もいわゆる不倫等があるのは、そのような行為をする人たちが生き残ってきたから、つまり、適応してきたからである。デヴィッド・バス (David M. Buss) によると、私たちには過去の時代に複数の配偶関係を持っていたことを示す生理学的な証拠がいくつもある。その中のひとつが男性の睾丸のサイズで、大きな睾丸はメスが複数のオスと交尾し、繁殖の機

会を提供することで、精子間の競争が激しくなった結果進化したものだ。これは、1回の射精でより多くの精子をメスの体内に入れた方が他の精子を押しよけるのに有利だからだ(116)。オスのゴリラはハーレムをもち、メスに目を光らせることにより、他のオスと交尾する確率が低いので、ゴリラの睾丸は体重比 0.02 と小さく、一方、メスが浮気性のチンパンジーにおいては、オスの睾丸は体重比 0.3 と大きくなる。人間は 0.04~0.08 とゴリラとチンパンジーの間となり、チンパンジーほどは浮気性ではないことになる(Kanazawa & Miller 84)。バスは、「人間の睾丸が相対的に大きいという事実は、人類の進化の歴史において、女性が数日の間に複数の男性と性交するのが日常的であったことの有力な証拠となる」と指摘している(116)。

姦通が1回だとすると、それは「その場限りの情事」、つまり、カジュアルセックスということになるであろう。バスによると、これは普遍的に見られる行為で、進化的にも重要な意味を持っている。多くの人が、浮気者を罵るのは、そうした人々が自分自身の性戦略のじゃまになりかねないからだ(114-15)。

男性と女性とでは、カジュアルセックスに対する戦略が異なっている。まず、祖先の男性にとって、カジュアルセックスの最大の利益は、子孫の数が増えることだった。男性は、その結果、重要な適応上の問題に直面した。つまり、いかにしてバラエティに富んだ女性と性交するかだ。そのため男性は多くの女性を求めるよう進化した(Buss 119-20)。つまり、自分の子孫を残す機会をたくさん作ることが大切となる。ディムズデールは、数少ないチャンス、実際、生涯で一度だけのチャンスを手に入れることができたことになる。

一方、女性にはカジュアルセックスのメリットはないように見えるが、実は多く存在しているようだ。バスの主張に沿って 6 つほど確認していきたい。①「カジュアルセックスのキーとなる利益のひとつは、資源を直接手に入れることができることだ」(134)。いざというときに食料等を特別に与えてくれる可能性が期待できる。ヘスターは誰も知り合いのいないニューイングランドに単身で来ており、夫のチリングワースから 2 年も音信不通であった。現代のように女性一人で生きていくことは非常に難しかったことが推測される。渡辺利雄は、「一人暮らしの孤独と不安から、ディムズデールと親密な関係になった」(297)と述べている。

ヘスターは姦通、つまり、夫がある身でありながらディムズデールと関係を持ったが、彼女の意識の中ではどうであったろうか。初期マサチューセッツでは、コネチカットの離婚法に準じて離婚が認められていた。その条件の中に 3 年にわたる故意の遺棄(willful desertion)、夫の 7 年にわたる不慮の不在(providentiall [sic] absence)、性的不能などがある(Morgan 37)。チリングワースはアメリカで異民族に捕らえられていた。ヘスターは待てども訪れない彼に、移住前の住所宛に手紙を書くなどして連絡を取ろうとしたはずだ。しかし、ヘスターがボストンに来て以来、夫から「何の音沙汰もなかった(no tidings have come)」(62)。ヘスターは本来なら姦通の罪で死刑だが、判事がさらし台に 3 時間立たせ、緋文字を生涯着けるだけに減刑したのは、「ほぼ確実に(most likely)、彼女の夫は海底に沈んでいる」と考えたからだ(63)。ヘスター自身も、夫が現れることなどもうないだろうと思っていたことは想像でき、彼女の意識の中では、離婚の条件の 7 年になっても不思議ではないであろう。

さらに、チリングワースは、「海でも陸でもひどい災難 (grievous mishaps by sea and land)」に遭ったと言っており (61)、異教徒に捕まる以前に、当時の船旅も安全ではなかったことが伺い知れる。そのような状況下で、危険な船旅に女性単身で行かせた、愛を感じていないチリングワースに対し、離婚の条件の故意の遺棄を感じ取っていたかもしれない。

ヘスターの意識の中では夫はすでに存在せず、将来どのように生き残っていくかが重要になっており、ディムズデルと関係を持ったとき、姦通を犯していると思っていなかったとしても不思議ではない。孤独と不安の中、高名な牧師と関係を持てば、食料など資源を得やすくなる。こう考えると、先程の渡辺の指摘は的を射ている。しかし、なぜヘスターは実際ディムズデルと関係を持ったのかに答えなければいけない。それは、意識には上らない生物の究極の目的である、子孫を残すためだったのではないだろうか。

ヘスターが意識の中では夫はいないものだと思っていたとすると、②「情事はまた、夫になる可能性のある男性を評価 (値踏み) する機会を与えてくれる」(136)。普段見せない姿に、本当にいざというときに助けてくれる人なのか等を探ることなどができであろう。③「女性はまた、さらなる保護を、他の男性や競争者の女性との争いに対し、確保する」(138)。人間関係のいざこざの仲介や、仕事の斡旋などを期待できるかもしれない。提督邸の広間で、権力を持った男たちにより、娘のパールから引き離されそうになったとき、ディムズデルが擁護してそのことを阻止してくれた。確かに、彼はパールの父親であったが、たとえそうでなくても、ヘスターと情事の関係を持っていたのなら、同じことをしていたであろう。④「愛する人が、女性の配偶者が逃げ出したり、病気やけがをしたり、生殖能力がなかったり、死んだりしたのがわかったとき、代替要員となりうり」、短期間にコストをかけずに新しいパートナーを見つけることができる (139)。実際に、チリングワースが亡くなっていたり、離婚の条件を満たしていたりしていたら、2 人は何の問題もなく結ばれていたかもしれない。

別の角度から見ると、⑤「配偶市場 (the mating market) で自分の価値 (desirability) をより正確に知ることができる」(145)。特に女性としてどのくらい価値があるのか探ること、例えば、高名な牧師が相手にしてくれないのであれば、高望みをしてはいけないと知ることができる。自分の価値を見誤れば、当然、子孫を残しづらくなる。⑥「女性は、カジュアルセックスを通して、子供に受け継がせる優れた遺伝子を得ることも可能になる」(140)。ヘスターは実際に大きな犠牲を払うことになったが、高名な牧師との子孫を残すことができた。

6. まとめ

批評で本格的に論じてこられなかったヘスターとディムズデルの姦通そのものについて、「動物」という言葉に注目して議論した。その 2 人に関して「動物 (性)」は軽く触れられるが、「税関」の検査官と船長については詳しく説明されていた。つまり、「動物」とは本能のままに行動することに接続される。船長の例では、そのことは人間の法の及ばない海上での行動が元となり、狩猟採集時代の生活を営むネイティブアメリカンとも関連付けられた。一方、検査官に関しては、本能のままに生きる人間であることが強調されたが、実は、そのために生物の究極的な目的である子孫繁栄に成功していることに語り手は気づかず、それゆえ、

そのことは表には出てこなかった。「動物」と関連付けられた 2 人の姦通は、実は、子孫繁栄につながることであった。そのことに当該の 2 人も気づいておらず、表に出ては来ていない。

「動物」的なことは子孫繁栄に関する本能と接続されているが、そのことは私たち人間も『緋文字』のテキストにも顕在化していないことが共通する。ヘスターとディムズデールの 2 人は、人間の法の届かない原生林で宗教誕生前の人間としての本能、つまり、一夫一妻制ではない狩猟採集時代の行動規範により、自分の子孫を残すという行動を取ったら、再び法の社会に戻るとたちまち、姦通として非難の対象になった。

本稿では、愛し合っただけの姦通という立場は取っていないが、その可能性はあるのだろうか。ヘスターがディムズデールに対して愛情を持っているという記述はテキスト中にあったが、ディムズデールに関してはヘスターに対しても子供に対しても、知り合いとして擁護することはあっても、愛情を示したという記述はないし、行間からも見受けられないようだ。ディムズデールを無責任な父親にしているのには 2 つの理由が考えられる。進化心理学の本に「ママのベビー (baby) は、パパのメイビー (maybe)」という言葉がよく引用される。遺伝子検査でもしない限り父親にとっては、子供が本当に自分の子供であるかは確かではなく、メイビーであるということだ。また、父親は 1 人の子供に対する重要度が母親より低くなる。それは、生涯に持てる子供の数は、男性のほうが圧倒的に多いからだ (Kanazawa & Miller 109-10)。一方、ヘスターにとって、子供は確実に自分の子供であり、相手がディムズデールであることに確信を持っている。カジュアルセックスの戦略である、いざというときに助けてくれる存在で、大事な子どもの父親であるディムズデールに、姦通後、愛情を抱くように変化していったのかもしれない。

今回の発表の多くは、テキストからなるべく多くの情報を示すようにしたつもりだが、推測の域を出ていないことは否めない。ヘスターが姦通は、「それなりに神聖なところがあった」と言うが (195)、進化心理学を援用し、人間の本性に焦点を当ててテキストを読むことも、それなりに意味があることなのではないだろうか。

※ 本稿は第 46 回 岡山英文学会 大会 (2024 年 9 月 28 日 (土)) での発表、『緋文字』における姦通から子孫繁栄への道 —進化心理学からの考察— に、加筆、修正したものである。

注

1. 西谷拓哉 他編 『ロマンスの倫理と語り—いまホーソーンを読む理由—』
2. 他の 3 つの原則は、「脳は特別な期間ではない」、「人間の本性は生まれつきのものだ」、「人間の行動は生まれ持った人間の本性と環境の両方の産物である」というものである。(Kanazawa & Miller 18-20)
3. 本文の訳は八木敏雄のものをさせていただいた。ただし、福原麟太郎訳、小川高義訳も参考にしながら、適宜変更を加えさせていただいた。
4. 1993 年、高知大学に於いて。

Works Cited

- Barash, David C., and Nanelle R. Barash. *Madame Bovary's Ovaries: A Darwinian Look at Literature*, 2005. Delta, 2006.
- Barkow, Jerome H., et al, editors. *The Adapted Mind: Evolutionary Psychology and the Generation of Culture*, Oxford UP, 1992.
- Buss, David M. *The Evolution of Desire: Strategies of Human Mating*, Revised and Updated Edition, Basic Books, 2016. (『男と女のだましあいー人の性行動の進化ー』狩野秀之 訳、草思社、2000 年。)
- Carroll, Joseph. *Literary Darwinism: Evolution, Human Nature and Literature*, Routledge, 2004.
- Crews, Frederick. *The Sin of the Fathers*, U of California P, 1989.
- Ellis, Bruce J., and David F. Bjorkund. "Preface." *Origins of the Social Mind: Evolutionary Psychology and Child Development*, edited by Bruce J. Ellis and David F. Bjorkund, The Guilford P, 2005, pp. iv-vii.
- Harari, Yuval Noah. *Sapiens: A Brief History of Humankind*, Vintage Book, 2015. (『サピエンス全史ー文明の構造と人類の幸福ー』(上)・(下) 柴田裕之 訳、河出書房新社、2016 年。)
- Hawthorne, Nathaniel. *The Scarlet Letter*. vol. 1 of *CE*, 1962. (『完訳 緋文字』 八木敏雄 訳、岩波文庫、1992 年。『緋文字』 福原麟太郎 訳、角川文庫、改版 1995 年。『緋文字』 小川高義 訳、光文社古典新訳文庫、2013 年。)
- . "Young Goodman Brown." *Mosses from an Old Manse*, vol.10 of *CE*, 1974, pp.74-90.
- Kanazawa, Satoshi, and Alan S. Miller. *Why Beautiful People Have More Daughters*. A Perigee Book, 2007. (『進化心理学から考えるホモサピエンス』 伊藤和子 訳、パンローリング、2019 年。)
- Kenrick, Douglas T., and Vladas Griskevicius. *The Rational Animal: How Evolution Made Us Smarter Than We Think*, Basic Books, 2013. (『きみの脳はなぜ「愚かな選択」をしてしまうのか <意思決定の進化論>』 熊谷淳子 訳、講談社、2015 年。)
- Lawrence, D. H. *Studies in Classic American Literature*, Cambridge UP, 2003.
- Male, Roy R. *Hawthorne's Tragic Vision*, W. W. Norton, 1964.
- Moalem, Sharon. *How Sex Works*, HarperCollins e-book, Adobe Digital Edition (Kindle 版), 2009. (『人はなぜ SEX をするのか？ー進化のための遺伝子の最新研究ー』 実川元子 訳、アスペクト、2010 年。)
- Morgan, Edmand S. *The Puritan Family: Religion and Domestic Relations in Seventeenth-Century New England*, Harper & Row, 1966.
- Vires, Ad de. *Dictionary of Symbolism and Imagery*, North-Holland, 1976.
- 佐伯彰一 『アメリカ文学史』 筑摩書房、1980 年。
- 西谷拓哉 他編 『マンスの倫理と語りーいまホーソーンを読む理由ー』 開文社出版、2023 年。
- 長谷川寿一 他 『進化と人間文化』 第 2 版、東京大学出版、2022 年。

平石貴樹 『アメリカ文学史』 松柏社、2010 年。

持留浩二 「『ライ麦畑でつかまえて』における親子間対立—進化論批評的解釈—」『英文学論集』第 14 号、佛教大学英文学会、2007 年、12-28 頁。

八木敏雄 「姦通小説としての『緋文字』」 國重純二 編、『アメリカ文学ミレニウム—[I]』南雲堂、2001 年、145-167 頁。

渡辺利雄 『講義 アメリカ文学史』第 I 巻、研究社、2007 年。

The Oxford English Dictionary, edited by James A.H. Murray, et al, Clarendon Press, 1933.